

草地更新時におけるMCPB液剤によるエゾノギシギシの防除法

(畜試、草地部)

1. 背景とねらい

草地更新時に実生由来のエゾノギシギシが発芽し、繁茂することがその後の草地管理上問題となる。現在の当該草に対する防除法としては、幼苗期にアージラン液剤及びMCPソーダ塩の全面散布が基準となっているが、前者はイネ科草に、後者はマメ科草に薬害を起こすことが認められる。そこで、混播草地において牧草に影響を与えずエゾノギシギシを防除する方法が求められている。

2. 技術の内容

1) 除草剤名等

MCPB液剤 (商品名: トロポトックス)、毒性・魚毒性: 普通物、A類。

2) 除草剤の特性

ホルモン型吸収移行性の選択性除草剤で、イネ科雑草よりも広葉雑草に強く作用する。莖葉処理されたMCPBは、植物体内で β -酸化されMCPとなり活性を示すので殺草性はMCPに類似するがクローバ類は β -酸化能力がないので、一時的に被害がみられてもその後回復する。殺草効果はMCPソーダ塩より約1週間遅れて発現する。

3) 使用方法

本薬剤の処理時期は草地更新後、ギシギシの葉数が4~6葉の幼苗期に全面散布することによりMCPソーダ塩と同等の効果が得られる。薬量は、葉令4葉で草丈10cm以下のギシギシでは200cc/10aで完全に枯死するが、それ以上生育の進んだ個体では完全に殺草することは難しい。散布は水、50~100リットルに希釈して行う。

イネ科牧草に対する薬害は認められない。マメ科牧草においては散布後に褐変、捻転などの薬害が認められ、薬量が多い程著しい。しかし、その後再生回復する個体がみられMCPソーダ塩と比較し薬害程度は軽い。

4) 使用基準

区分	処理法	使用時期	使用量	適用地帯	適用雑草
新播草地	草地更新後、莖葉全面散布	更新後ギシギシの芽が出揃った幼苗期	2~3葉 60~100 4~6葉 100~250 (cc/10a)	全県下	幼苗期のギシギシ類 1年生広葉雑草

3. 指導上の留意点

1) 薬量水準はギシギシの生育状態から判断し選択するが、幼苗ほど効果が高い。

2) 殺草効果・薬害については散布時の温度によって影響を受けることが考えられる。

4. 参考資料

小田桐勉・坂本晃，エゾノギシギシの総合防除．青森畜試試験研究成績書（昭和61年～62年）32～36（1987）．

表1 MCPB液剤散布後のエゾノギシギシの株数の推移 (株/m²)

項目	薬量	幼苗期の株 ¹⁾			やや生育の進んだ幼苗期の株 ²⁾		
		0	200	400	0	200	400cc/10a
越冬前(10/19)		208	196	—	172	204	156
翌春(4/21)		112	0	—	140	12	0
株の残存率(%)		53.8	0	—	81.4	5.9	0
翌春の草勢(5/16)		15.3	0	—	42.2	16.5	0 cm

1) 4.2～5.1葉、草丈3.9～8.1 cm ※薬剤散布時期 1987年10月15日

2) 4.3～5.7葉、草丈8.2～13.6 cm

表2 牧草に対する薬害の発生状況

(青森畜試)

M C P B				M C P			
処理区	草種	18日目	35日目	処理区	草種	18日目	35日目
少量区	OG	—	—	少量区	OG	—	—
	AL	Ⅲ～Ⅳ・再	Ⅲ～Ⅳ・再		AL	Ⅲ	Ⅲ
	Wc	—～+	—～Ⅱ・再		Wc	Ⅲ～Ⅳ・再	Ⅲ～Ⅳ・再
中量区	OG	—	—	中量区	OG	—	—
	AL	Ⅲ～Ⅳ・再	Ⅲ～Ⅳ・再		AL	Ⅲ	Ⅲ
	Wc	—～+	Ⅲ～Ⅳ・再		Wc	Ⅲ	Ⅲ
多量区	OG	—	—	多量区	OG	—	—
	AL	Ⅲ～Ⅳ・再	Ⅲ～Ⅳ・再		AL	Ⅲ	Ⅲ
	Wc	Ⅲ～Ⅳ・再	Ⅲ～Ⅳ・再		Wc	Ⅲ	Ⅲ

(注) 1. 薬害の発生程度（牧野草地関係除草剤実施基準を参考にした。）

- ：薬害なし， ±：薬害が認められる， +：薬害が認められるが葉全体に及ばない，
 Ⅱ：葉全体に及ぶが茎まで及ばない， Ⅲ：茎葉全体に薬害が認められる，
 Ⅳ：株の地上部が枯死したもの。
 2. 再：再生回復が認められるもの

※少量区：200cc/10a

中量区：400

多量区：600